

中国空軍が戦術訓練の規模を拡大

漢和防務評論 20180306(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国甘肅省、酒泉市の中心部から遠く離れた砂漠の中に中国空軍合同戦術訓練センターがあります。

中国空軍は、西側戦闘機との空中戦を想定し、“青軍”部隊（想定西側戦闘機）に J-10 戦闘機及び J-20 戦闘機を使って現有戦闘機の各機種との対抗訓練を行い、戦法研究を行っているようです。

最近は規模と内容が充実拡大し、随時早期警戒管制機 KJ-500、Y-8 電子戦機が参加しているとのこと。

衛星写真で見ると、基地の周辺には何もなく、月世界のようです。

KDR 香港特電：

中国空軍は、合同戦術訓練の規模を拡大している。2016 年には、鼎新基地の合同戦術訓練センター（甘肅省酒泉市）を改修し、“青軍”部隊（西側空軍を想定）を常駐させ、飛行場のエプロンを 50M 延長した。

現在は、少なくとも一度に 2 個旅団の戦闘機が駐機できる広さがある。一般状況下で、少なくとも、J-10、J-16、J-11B、J-16 シリーズ各 1 個大隊を発見した。一部の機種は約 4 機の混成である。

訓練規模が拡大したため、多くの訓練用弾薬が必要になり、弾薬庫は更新されつつある。

訓練の強度（ソーテー数）は極めて大きく、例えば、2017 年 11 月 4 日、全部で 30 機の SU-30、J-16、J-11 が駐機していた（1 個旅団に見合う数）が、翌 5 日には 8 機しか残っていなかった。2 種類の SU シリーズ戦闘機の塗装から見て、それぞれ別の所属部隊であることが分かる。対抗訓練を行っていたのであろう。

これらの訓練には、随時 1 乃至 2 機の KJ-500 早期警戒機が参加している。このほか各種 Y-8 型電子戦機も出現している。

これらのことから、この訓練は、航空早期警戒管制機からの指揮を受け、複雑な電子戦環境下で行われていると見られる。

当然、鼎新基地には随時 J-10 シリーズ戦闘機が滞在し、訓練の重点は、第 3 世代戦闘機同士の対抗訓練とみられるが、2 機の J-20 戦闘機が訓練に参加するようになってからは、第 3 世代戦闘機と J-20 が対抗訓練を行い、各種戦闘機間の戦法を探索しているはずである。



鼎新基地（Google Earth）約 40 機の各種戦闘機が並んでいる。

以上